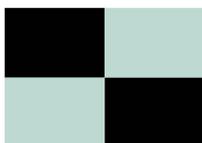




| | |
|-------------|---|
| Title | 言語景観から読み解く多民族社会：韓国ソウル特別市における外国人居住地域からの分析 |
| Author(s) | 磯野，英治 |
| Citation | 日本語研究(32)：191-205 |
| Issue Date | 2012-06-30 |
| URL | http://hdl.handle.net/10748/5981 |
| Rights | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |



TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

首都大学東京

<http://www.tmu.ac.jp/>

言語景観から読み解く多民族社会 —韓国ソウル特別市における外国人居住地域からの分析—

磯野 英治

1. はじめに

公共空間における書き言葉は言語景観研究として現在盛んに研究され、また注目もされつつある。そしてこれは国際化や多文化共生という言葉が大きく取り上げられていることとも無縁ではない。今や日本のみならず海外においても諸外国語を目にすることは多く、これらに関する議論が活発に行われている。しかし、日本国内のコリアンコミュニティなど、特定の事例研究は存在するものの、海外における外国人居住地域を言語景観研究から論じた研究は少ない。東アジアを中心に各国で外国人居住者が増加する現代社会では、多民族化の観点からの研究は必要性が高まっていると考えることができるだろう。このため本研究では、韓国ソウル特別市にあり、市内で最も古い外国人街として現在も約五千人の日本人が暮らしている日本人集住地域（東部仁村洞）、龍山米軍キャンプの近隣であり韓国初のイスラム聖院もあるアメリカ人を中心とした多国籍の外国人集住地域（梨泰院洞）という二つの外国人居住地域を対象として、言語景観からその地域の実態を分析することを目的とする。また併せて、ソウル特別市及び釜山広域市など観光客も多い規模の大きな繁華街と比較をすることで、外国人居住地域にみられる言語景観に多民族社会の特徴が大きく表れている点について考察する。これによって、国際化には外国人観光客も多い繁華街における「外に向かった国際化」と外国人居住地域における「内なる国際化・多民族化」があることを主張し、多民族社会をテーマとする研究の必要性とその意義について検討する¹⁾。

¹⁾ 本研究は2011年1月8日、富山大学で行われた日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム「多言語化する『地方』」で筆者が研究報告を行った「韓国ソウルの国際化・多民族化に対応する多言語景観」をもとに加筆・修正を行ったものである。

2. 先行研究

2.1 言語景観研究の広がり

日常生活の中で目にする「書き言葉」が注目されることは決して新しいことではなく、これまでも公共的、商業的な表示、標識を「言語景観 (Linguistics landscape)」と位置づけ、多言語表示の存在意義、社会の中の役割や意識、言語政策と関連付ける Landry & Bourhis (1997) などの研究が諸外国でも行われている。日本では国内の多言語表示 (庄司 2007、井上 2009、バックハウス 2009,2011) や少数コミュニティの言語使用 (金 2005、庄司 2009)、日本国内外の特定地域における言語使用 (朝日 2011、磯野 2011b、内山 2010、大西 2011、張 2011、中井 2011、日高 2011、松丸 2011、ロング 2011)、さらには神社や祠の文字表記を対象とした文化人類学、民俗学からの研究 (高岡 2011) や研究の方法論 (高田 2011) にまで至っており、活発に研究が行われている現状がある。

この中で本研究のキーワードである「外国人居住地域」を多民族化の観点から論じたものとしては、日本国内においてコリアンコミュニティに注目した金 (2005、2009)、外国人コミュニティとホスト社会の関係から論じた庄司 (2006,2009) がある。

金 (2005、2009) は、街角に見られるハングル表記の増加を多言語化のみならず、多民族化の象徴的なこととし、「(1) 主にホスト社会から外国人へ発信するもの (2) 外国人から外国人へ発信するもの (3) 外国人からホスト社会へ発信するもの」の3つに類型化できると述べている。(1) に見られる多言語サービスとしての公共表示や (2) に観察できるコリアンコミュニティ内の情報のやりとり (求人広告など)、(3) で論じられている外国人定住者がエスニック性を強調し店舗を経営する、という観点は興味深い。一方、庄司 (2006,2009) では、直接ビジネスに結びつかない言語景観の例として外国人コミュニティの多言語表示を挙げ、宗教活動や同郷出身者に向けた活動の案内が多いことを紹介している。これらの先行研究では、個別の事例について一定の観点から論じられている点において意義がある。しかし、ひとつの都市の中において、他の外国人居住地域との比較に言及が少ないため、本研究はこの部分でこれらの研究を補完する役割を果たすことを目指している。

2.2 韓国における言語景観研究

日本で言語景観が研究対象として扱われるようになり、その後活発に研究が行われるようになったのが比較的最近であることから分かるように、アジアにおいて例えば韓国における言語景観研究もまた少ない。李（2011）によれば、韓国では言語学の対象としての先行研究はほとんど見当たらず、「言語景観」という用語も一般的ではないといった指摘もある。韓国の言語景観を対象としたこれまでの研究には、地方都市である大邱広域市の言語景観を文字種とその採用率の観点から行った研究（李 2011）や、釜山広域市のハングルの言語景観を地域言語（釜山方言）の使用状況の観点から調査した研究（市島 2011）がある。さらに磯野（2011b）では、韓国二大都市であるソウル特別市と釜山広域市の公共表示と民間表示について、日本語を中心とした諸外国語がどのように扱われているのかという観点から対照研究を行っている。これらの研究は各都市における現状が把握できるという点において意義がある。しかし外国人居住地域など特定の外国人が暮らす地域を対象とした研究はまだ成されていない。「国際化」が実質的に進み、日本や韓国においてもその場所に居住・定住する外国人の数はもとより、様々な地域・国の人々との接触といった多様化は進んでいる。このような状況の中、外国人居住地域で言語景観がどのようなかたちで表れ、またその役割を担っているのかを調査することは、実態を把握するための一助ともなる。本研究では、「多民族化」の観点から言語景観を調査データとした先行研究が少ないこと、そしてそれらを調査・研究することの意義から、ソウル特別市に存在する二つの地域を対象に考察を行う。

3. 研究方法

3.1 言語景観の定義

本研究で扱う言語景観とは、ロング（2010）による「公的な場で見られる不特定多数の読み手に発せられ、自然にまたは受動的に視野に入る文字言語」と定義する。また言語景観の分類については、公共施設、公共物にある公共表示と街中の店舗などにある民間表示に分け（磯野 2011a,b）、その対象は語彙や文を含む看板や掲示物、ちらしやポスター、ラベルやステッカーなどに及ぶ（庄司 2009、磯野 2011a,b）。

3.2 調査地域

本研究では前述したソウル特別市内に存在する以下の地域を対象に分析を行う。

- (1) 東部仁村洞（日本人居住地域）
- (2) 梨泰院洞（アメリカ人を中心とした外国人居住地域）

3.3 用語の扱い方

本研究では、調査地域に見られる諸外国語を中心として分析を行うが、言語景観研究の特徴として「ひとつの看板に多言語表示が観察される」ことはよくあることである。このため用語についても磯野（2010a,2011a,b）で示したような観点を以て発展的な整理を行いたい。まずハングルは文字であり、話し言葉を含む「韓国語」という意味では使用できない。また韓国でも従来から漢字が普及しており、日本や中国の漢字とは異なっているが（例えば新字体の「写真」は韓国では旧字体の「寫眞」となる）、日本の常用漢字と韓国でそれにあたる基礎漢字で共通する1602字を比較調査した崔（2005）によれば、字体が異なるのは452字（約28%）と共通する漢字も少なくない。アルファベット表記に関しては「出口」が“Exit”と英語表記されているものと地名である「明洞」が“Myeong-dong”とアルファベット表記²⁾されているものでは根本的な位置づけが異なるが、本研究では、図4「Hangang Park」のように「アルファベット表記+英語表記」といった事例が多く観察される。このため英語やアルファベットの表記は「英語(E)」と統一した上で「ハングル(K)」「英語(E)」「日本語(J)」「中国語(C)」「ロシア語(R)」「スペイン語(S)」というような符号を調査資料に付す。但し表記の分類で問題となるのは、図2のような明らかな多言語表記の場合ではなく、図1「이촌・Ichon・二村」のように漢字が使用されていてもそれが日本人、中国人、或いは韓国人の誰に向けたものなのかが分からない例である。このため、本研究で漢字は日本語（かな・カタカナ）とともに使用されている場合、或いは明らかに日本人へ向けられている表記は「日本語(J)」に含め、その他は「漢字(Ka)」とする。本研究において漢字は、日本人に向けられたメッセージであっ

²⁾ 井上（2009）では「アルファベットはローマ字よりも広義の意味で扱える」という指摘があり、磯野（2010a,2011a,b）及び本研究でも参考としている。

ても新字体や旧字体が混在している事例がある。しかし漢字は表意文字のため漢字圏の人々に意味は伝達できるというメリットがあり、後述する特徴に見られるように例え旧字体であっても理解できないほど新字体と違う訳ではない。このためそれぞれの調査地の特性、及び調査内容からそれが日本語としての漢字 (J) なのか、または漢字圏の人々全般に向けた漢字 (Ka) であるのかを同定していく。

4. 多民族社会に見られる言語景観の特徴

4.1 東部仁村洞

ソウル最大の日本人街でありリトル東京とも称される東部仁村洞には、現在も5千人を超える日本人が居住している。もとはソウル市内で最も古い外国人街であり、1970年代から日本人が集まりだしたという歴史がある³⁾。まず地域の最寄り駅である地下鉄4号線二村駅の言語景観が図1、2、3である。図1は「이촌・Ichon・二村」、図2の駅構内の券売機の表示下部には「한국어・ENGLISH・日本語・中文」といった表記があって言語を選択できるようになっており、さらに図3は右上に左から韓国・アメリカ・日本・中国の国旗がデザインされ、多言語での手続きが可能な事を示している。これらから韓国の空港や電車、バスなどの公共表示はハングルや英語を基本とした「K・E・J・C」、或いは漢字圏の人々に配慮した「K・E・Ka」という共通性があることがわかる(2010a,2011a,b)。



図1 二川駅「K,E,Ka」

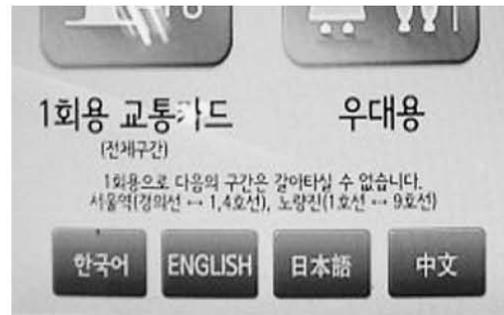


図2 券売機「K,E,J,C」①

街中のデータ収集については、二村駅からつながる商店街が途切れるところま

³⁾ 東部仁村洞・梨泰院に関する人口や歴史はともにソウル特別市 HP 参照のこと。

<http://www.seoul.go.kr/main/index.html>

でとし、大通りだけではなく、商店街エリアの小道も調査対象に含めた。まず場所を示す案内表示（図4）では「한강시민공원・Hangang Park・漢江市民公園」の漢字に注目すると、ハングルやアルファベット表記と並ぶ大きな文字で漢字が表記されている。さらに漢字は日本語における新字体と表記が同様であるため、日本人にも分かりやすい⁴⁾。

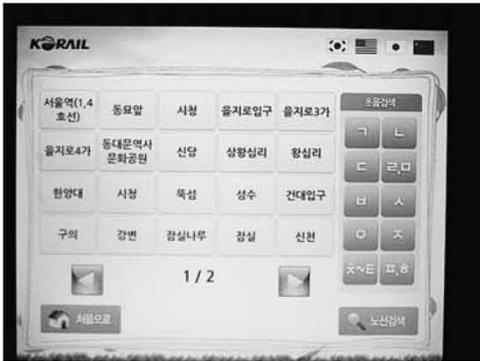


図3 券売機「K,E,J,C」②



図4 道路標識「K,E,Ka」

次に民間表示について、まず数の多い店舗は図5、6のような不動産屋である。本調査では既述のように駅を中心として商店街が途切れるまでの全ての道を調査対象とし、実際にデータを収集したのは二村駅4番出口を出た南側エリアの半径300メートルほどであった。それにも関わらず日本語を含む案内を表示した不動産屋は7店舗あり、それぞれの日本語に注目すると「日本人は日本語で相談

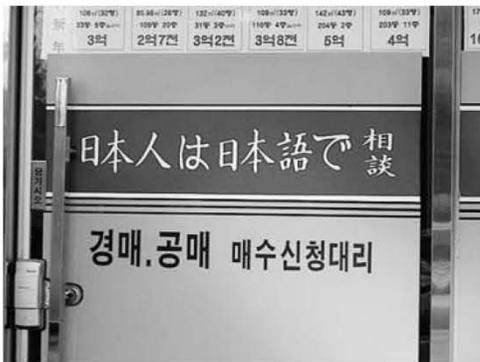


図5 不動産屋の日本語案内①



図6 不動産屋の日本語案内②

⁴⁾ 日本語と韓国語の漢字の対照は、中島仁中期朝鮮語研究室 (<http://mklabo.main.jp/>) を参考とした。

(図5)「日本人 RENT 専門 (図6)」など、これらの店舗の案内表示が、これから居住する予定の日本人や既に居住している日本人で引っ越しを予定している人々へ向けたメッセージであることがわかる。

街中の個別の事例を見ていくと、図7は「日本食品専門店・MONO MART・モノマート」と大きく表記されており、ハングル表記の存在が極端に薄いため、誰に向けたメッセージであるのか分かりやすい。さらに「専」は旧字体で新字体の「專」ではないが、「漢字 (Ka)」の定義で示したように日本人に意味の伝わる内容となっている。確かめるべく店主の許可を得て、店内の撮影と状況を聞くと、店主は韓国人の男性で妻が日本人、二人で店を営んでいるということであり、主な顧客は定住する日本人で周辺に居住する韓国人の客も少なくはないという説明が店主から日本語であった。よってこの店舗は立地や店舗特性からも、「日本食専門店」が日本語表記として位置づけられていると判断できる。図8は動物病院の看板で「日本語できます」のような表記は、多言語表示とともに施設の特長(つまり観光客は滅多に来ないと考えられる)からも居住者向けのものであると分かる。



図7 韓国人の店長が経営する店舗「K,E,J」



図8 動物病院の日本語表記「K,E,J」

4.2 梨泰院洞

梨泰院洞はソウル特別市の中で最も異国情緒が溢れているといわれるエリアで、近くに竜山米軍基地があることから、アメリカ人を中心とした様々な国籍の人々が集まるようになった地域である。現在はアメリカ人の他、ヨーロッパやイスラム圏の人々も集住している国際的な地域という認識が韓国国内でもあり、ソウル特別市の運営する外国人向け公式HPにも紹介文が掲載されている。東部仁

村洞と同様に、梨泰院洞の最寄り駅である地下鉄6号線の梨泰院駅は、基本的には「K・E・Ka」、「K・E・J・C」という共通表示で統一されている(図9、10)。次に街中にある公共表示については、図4で見た同じ漢江市民公園への案内表示や注意書きの看板であっても、ハングルと英語のみの併記が確認できた。(図11、12)。しかしさらに興味深いのは、ごみ捨てや就労、求人に関する案内のように実質的な生活と関連するものについては、ハングルや英語のみならず、多言語表記が多く観察されることである。



図9 梨泰院駅看板「K,E,Ka」



図10 駅構内の案内表示「K,E,J,C」



図11 道路標識「K,E」



図12 注意書きの看板「K,E」

図13のごみ捨て場の案内には「ハングル・英語・アラビア文字」が表記され、就労と求人に関する案内とその冊子では陳列順に「Korean・English&Philippines・China・Viet Nam・Mongolia・Sri Lanka・Indonesia・Pakistan・Russia&Uzbekistan・Thailand」といったようにアルファベット表記による表紙がある。そしてその内容はそれぞれ「韓国語・英語圏・中国語・ベトナム語・モンゴル語・シンハラ語・インドネシア語・ウルドゥー語・ロシア語

「圏・タイ語」話者を対象とした言語で書かれており、多言語化が見られる(図14)。



図13 ゴミ捨て場の多言語表記



図14 求人・就労に関する多言語表記

梨泰院洞の街中にある店舗でまず多く目にするのは、家具や雑貨を扱う図15、16のようなアンティークショップであり、これらはハミルトンホテルの向かいにある普光洞通りに集中している。東部仁村洞の調査と同様に梨泰院からこの通りを店舗が切れる場所までデータ収集を行った結果、アンティークショップは13店舗が存在した。このうち図15のようなアルファベットの単独表記(フランス語+英語)が4店舗、図16のようにハングルと英語が併記されているもののハングル表記が極端に小さい店が2店舗、その反対にハングル表記に対して英語の表記が小さい店が1店舗、ハングルと英語が同じ位のサイズで表記されている店が6店舗という結果であった。郭(1999)の前出の仁寺洞の調査において215という商業店舗の看板において英語の単独表記が6つであったという結果を踏まえると、後述する英語のみの店舗看板とともに、梨泰院洞は英語やフランス語といったアルファベット表記の単独使用率が高いことがわかる。



図15 アンティークショップ①「E,F」



図16 アンティークショップ②「K,E」

次に梨泰院洞周辺に住む外国人居住者向けの言語景観として顕著な特徴が観察できたのは、東部仁村洞と同様に図 17、18 のような病院関係の看板である。それぞれの写真は同じ病院であり図 17 には「정염성이 강한 개 신종플루 (伝染性が強い犬 新型インフルエンザ)」、図 18 には「청화종합동물병원 (チュンファ総合病院)」とハングル表記されている。ハングル表記と共に各所に使用されている英語に注目すると、図 17 では「病院には英語が可能なスタッフが勤務している」こと、図 18 では「ペットの移送なども含め全てのことがこの病院でできること」を文レベルで説明している。このためこれらは主に付近に居住している英語話者へのメッセージと考えることができる。

第三にハミルトンホテルを背にして普光洞通りへ入り、すぐ一つ目の道を左折すると携帯電話や国際電話のためのカードを販売する店舗、ドラッグストア、アフリカやインドの民族料理のレストランなどがあり、雑多な雰囲気のある小さな通りがある。電話関連の品物を販売している店に注目すると、その通りには販売店が



図 17 動物医院①「K,E」



図 18 動物病院②「K,E」

6 店舗、その中で図 19 のように英語のみの単独表記の店舗は 3 店舗、ハングルと英語が同じ位のサイズだったものが 1 店舗、またハングルが小さく看板のほぼ全体が英語だったものが 2 店舗であった。英語表記のみの看板は言うまでもなく居住者向けであると考えられるが、全体の状況からも外国語表記の多用は居住外国人に対する意識を窺い知ることができる。また外国人観光客が旅先で散髪することは考えにくいので、図 20 のような英語による単独表記の看板の内容からも居住者向けの店舗であることが明確にわかる。さらに図 20 は「BOYZ CUTZ」というようにインフォーマルな表記を採用することによって、砕けた雰囲気やかっこよさを演出し、入りやすい店舗を地域住民にアピールしている。



図 19 電話会社「E」



図 20 美容院「E」

5. 考察

以上、韓国ソウル特別市の日本人定住地域である東部仁村洞とアメリカ人を中心とした多国籍の外国人居住地域である梨泰院洞について、多民族社会にみられる特徴を、言語景観を通じて調査を行った。ここでは韓国国内の他地域、すなわちソウル特別市明洞や釜山広域市南浦洞といった観光客や短期滞在者が多い地域との比較、また先行研究における日本国内のコリアンコミュニティとの比較から、いくつかの新しい観点と研究の意義について検討したい。

まず、本研究の二調査地域において、電車やバスといった公共交通機関については、他の地域と共通した大枠としての「K・E・Ka」「K・E・J・C」という多言語表示が観察できた。しかし一般道の標識には地域住民に対応した表記と配慮が確認できるなど（例えば東部仁村洞であれば表意文字としての漢字が併記されていれば意味はわかる）、街中へ一歩出るとそれぞれの地域に応じた言語景観も確認できた。さらに地域住民のためと考えられる店舗や病院、美容院などは、図 21 の「韓国によろこそ楽しんで下さい」、また図 22 の「この町を知らなかったら聞いてください」といった文言に見られるような観光客目当ての繁華街の言語景観とは、一線を画すものである。これまでの言語景観研究では、国家全体としてまずどのような特徴があるのかといったような調査が特に海外の言語景観研究では多かったため、外国人居住地域についてその社会的背景とともにその他の地域と比較・検討を行い考察することは、国際化に伴う多民族化がどのようなかたちで表れているのかという点で、言語政策や言語サービスの観点から意義があるだろう。



図 21 ソウル特別市明洞



図 22 釜山広域市南浦洞

一方、日本における多民族化の観点と併せて考察した場合には、本研究から新たな観点を提示することもできる。日本国内のコリアンコミュニティにおける研究で金（2005、2009）は、「(1) 主にホスト社会から外国人へ発信するもの (2) 外国人から外国人へ発信するもの (3) 外国人からホスト社会へ発信するもの」に類型化している。ここで論じられている「(3) 外国人からホスト社会へ発信するもの」とは、外国人定住者が自身のエスニック性を強調し店舗などを営むという、いわば日本に住んでいる日本人向けのものであるが、本研究から見てきたのは、例えば「韓国人が居住者向けの店舗や施設を経営し、外国人居住者のコミュニティと交流を持っている」という事例である。なぜならば図 5、6 に見られる日本語の案内表記は日本国内では見られない表現であるため、日本語が少しはできる韓国人が店員であると考えられるからである。つまり、日本語ネイティブが来客向けの案内を日本語で書く場合、主語が「日本人 (は) ~」や文末が「~で相談。」というような表現は使用せず、「日本人のお客様 (は) ~」や「~でご相談頂けます。」のようにビジネスマナーのある表現を使う。このような点で、やはり図 5、6 は日本国内で目にすればより違和感のあるものである。言語景観研究では、そこにある看板やポスターといった目に入る言語景観にどのような言語があるのか、またその言語がどのように使用されているのかといった研究はこれまでも多く行われている。しかし、特色のある地域を取り上げ、そこに観察される言語景観がどういった人々に向けて発せられているのか、またその発信者は誰か、そしてどういった役割を担っているのかといった研究は少ない。その意味合いにおいて、「内なる国際化・多民族化」を調査する手段としての意義を本研究では述べた。

6. おわりに

本研究では、韓国ソウル特別市に存在する外国人居住地域を多民族化の観点から分析することにより、その一端について論じた。その結果、表層的には見えてこない韓国国内の外国人居住地域の状況を調査することができた。言語景観研究において、これまでに多民族化の観点から調査された研究は多くない。しかし、日本と韓国のように地理的に近接した地域であってもその状況は同様ではないことを本研究から考えると、このような観点からの研究もこれから必要ではないかと考えられる。今後は実際の店舗数や店舗の経営内容についての追跡調査、フィールドワークによる国内外にある同様の外国人居住地域の調査、比較検証を行い、多民族社会における言語景観の意味や役割について検討していきたい。

参考文献

- Laundry, R. and R.Y. Bourhis (1997). Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology* 16, 23-49.
- 朝日祥之 (2011) 『北の外地』言語景観の対照—北海道とサハリンを事例に—
中井精一他編、桂書房、96-109.
- 磯野英治 (2010a) 「日本海を渡った日本語の言語景観—韓国各都市における現状—」『日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム 世界の言語景観・日本の言語景観予稿集』、富山大学・総合地球環境学研究所、13-16.
- (2011a) 「韓国ソウルの国際化・多民族化に対応する多言語景観」
『日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム 多言語化する「地方」予稿集』、富山大学人文学部、18-21.
- (2011b) 「韓国における日本語の言語景観—各都市の現状分析と日本語教育への応用可能性について—」、中井精一他編、桂書房、74-95.
- 李舜炯 (2011) 「看板表記にみる現代韓国の言語景観—大邱広域市を事例として—」、中井精一他編、桂書房、38-53.
- 市島佑起子 (2011) 「韓国地方都市の言語景観—釜山広域市の言語景観から見る地方都市の現状—」、中井精一他編、桂書房、54-73.
- 井上史雄 (2009) 「経済言語学からみた言語景観—過去と現在—」『日本の言語景観』、庄司博史・ペート バックハウス・フロリアン マルクス編著、三元

社、53-78.

内山純蔵 (2010) 「景観とは何かー形成の地域性とプロセスー」『平成 21 年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム世界の言語景観・日本の言語景観』、富山大学人文学部、4-7.

大西拓一郎 (2011) 「町の言語景観・里の言語景観」、中井精一他編、桂書房、166-177.

郭明姫 (1999) 『韓国の看板デザインの歴史的変遷とその社会的文化的背景の考察』、九州大学大学院博士論文.

金美善 (2005) 「言語景観にみえる在日コリアンの言語使用」『在日コリアンの言語相』、真田信治・生越直樹・任榮哲編、和泉書院、195-224.

————— (2009) 「言語景観における移民言語のあらわれかたーコリアンコミュニティの言語変容を事例にー」『日本の言語景観』、庄司博史・ペートバックハウス・フロリアン マルクス編著、三元社、187-205.

庄司博史 編 (2006) 『まちかど多言語表示調査報告書』、多言語化現象研究会

————— (2009) 「多言語化と言語景観ー言語景観からなにがみえるかー」『日本の言語景観』、庄司博史・ペートバックハウス・フロリアン マルクス編著、三元社、17-52.

高岡弘幸 (2011) 「社会分析ツールとしての言語景観ー観光を中心としてー」、中井精一他編、桂書房、131-148.

高田智和 (2011) 「『言語景観』の記録と分析のために」、中井精一他編、桂書房、149-165.

崔 廷珉 (2005) 日・韓漢字字体の相違による問題点ー 韓国人日本語学習者向けの効果的な漢字指導を目指してー 『国語学 研究と資料』 28、25-36.

張守祥 (2011) 「中国（黒龍江省）における言語景観ーハルビン市とチャムス市での調査に基づいてー」、中井精一他編、桂書房、24-37.

中井精一・ダニエル ロング編(2011) 『世界の言語景観 日本の言語景観ー景色の中のことばー』桂書房.

中井精一 (2011) 「言語景観に見る地方都市の文化虚弱性」、中井精一他編、桂書房、238-258.

日高水穂 (2011) 「層を成す『増田』の地域表象ー『りんごの里』から『蔵のある街』へー」、中井精一他編、桂書房、200-217.

ペート・バックハウス (2011) 「言語景観から読み解く日本の多言語化—東京を事例に—」、中井精一他編、桂書房、122-128.

松丸真大 (2011) 「都の言語景観—京都市中心部の提灯に注目して—」、中井精一他編、桂書房、178-190.

ロング・ダニエル (2010) 「奄美ことばの言語景観」『東アジア内海の環境と文化』、金関恕監修、内山純蔵・中井精一・中村大編、桂書房、174-199.

————— (2011) 「世界の少数言語の言語景観に見られるアイデンティティの主張」、中井精一他編、桂書房、3-12.

参考 URL

서울특별시청 HP (<http://www.seoul.go.kr/main/index.html>)

KBS WORLD (<http://world.kbs.co.kr/>)

(いその ひではる・首都大学東京大学院博士後期課程)